HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	まえがき
Author(s)	山田, 祥子
Relation	佐藤チヨ演唱; 池上二良採録・解説; 山田祥子編訳; E.ビビコワ露訳; 津曲敏郎監修・序, ツングース言語文化論集シーグーニ物語テキスト : ウイルタ長編英雄物語ニグマー = «Повесть о Сйӈӯни» : Героический эпос уйльта ниӈмā. 北海道大学文学研究科, 2014, 258p, (ツングース言語文化論集 = Исследования по Тунгусоведению, 58).
Citation	ツングース言語文化論集, 58, 3-8
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56213
Type	report
File Information	12yamada_ja.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ま え が き

山田　祥子

ウイルタの人々

ウイルタ（Uilta, уйльта）は、サハリン（樺太）島の先住少数民族である。かつてオロッコ（Orok, Ороки）という民族名称が長く知られていたが、近年では自称にもとづいてウイルタと呼んでいる。ウイルタの固有の言語であるウイルタ語は、ツングース諸語（ツングース・満洲諸語）の一つで、そのなかでもアムール川流域で話されるナーナイ語やウルチャ語との親縁関係が近い（Ikegami 1974 [2001: 395]）。

ウイルタは伝統的にトナカイを飼育し、季節的に移動しながら暮らしていた。その春夏季の拠点によって、北と南の二つの地域グループに大別される（Roon 1996: 61-63）。彼らの話すウイルタ語にも地域グループに対応する方言差があり、島北東部のワール Вал を中心とする地方で話される北部方言（北方言）と、中東部のポロナイスク Поронайск（かつての敷香（しすか））を中心とする地方で話される南部方言（南方言）の二つに分けられる（池上1994 [2001: 247-248]）。

ウイルタの南のグループないし南部方言の話者は、1905年から40年間、日本領樺太で暮らした。そこで日本名をもち日本語教育を受けたウイルタのなかには、戦後に北海道へ移り住んだ人たちもいた。本資料が紹介するニグマー（語りもの）は北海道へ移り住んだウイルタ女性、佐藤チヨ氏から採録されたものである。

佐藤チヨ（ウイルタ名 Napka）氏は、1910年頃に日本領樺太の留久玉（るくたま）に生まれた。各地を転々としながら成長したのち、戦後1947年に北海道へ移り住んだ。1949年に池上二良教授と知り合ってから1985年に亡くなられるまで、ウイルタの口頭文芸やウイルタ語の語彙・文法にかんする情報を多く提供され、日本におけるウイルタの調査・研究に甚大な貢献をなさった。同氏のことは、本書再掲の池上（1984a）でも紹介されている。

ウイルタの口頭文芸のなかのニグマー

ウイルタの口頭文芸には、代表的なジャンルとして、(1) テールグ təəluŋu（実話と考えられている物語。言い伝えや昔話をふくむ）、(2) サフリ saxuri（架空の作り話と考えられている、おとぎ話）、(3) ニグマー niŋmaa（語りもの）、(4) ハーガ xəəgə（その場限りで消えずに伝承された即興歌）、(5) ガヤウ gajau（なぞなぞ）の五つが挙げられる（池上1984a, 2002）。これはウイルタの南のグループについての研究による分類であるが、北のグループでも同様のジャンルがあることがわかっている。ただし、名称には若干の方言差があり、ニグマーは北方言では nimŋaa（ニムガー）となる（露訳者で北部方言の話者であるビビコワ氏が序文で「ニムガー」という用語をつかうのはそのためである）。

ニグマーは、語りの部分と節（ふし）をつけて謡う部分で構成され、他のジャンルに比

べて一篇が長大である。「劇的な構成をもち、中に唄あり、会話あり、といったもので、数時間、数夜をも要する段物」（山本1968: 208）で、これを口演することは日本の浪曲にも似た特別な芸能とみられていたようである（池上2002: 7-9採録のテールグも参考）。形式的な特徴によりジャンル名に「語りもの」という訳語を当てているが、内容からみて「英雄物語」「英雄叙事詩」と呼ぶこともある。

ニグマー「シーグーニ物語」のテキスト化について

本書が紹介するのは、池上二良教授が佐藤チヨ氏から1977年9月27日に録音されたニグマーの一篇で、シーグーニという人物を主人公とすることから「シーグーニ物語」と呼んでいる。録音時間は、全体で約4時間40分におよぶ。

「シーグーニ物語」の冒頭部分が1957年に佐藤氏から録音されていたことは、池上（1984a）で述べられているとおりである。このときの録音の最初の10分余りは、1984年に「シーグーニ物語＜冒頭部分＞」としてテキスト化されている（池上1984b；池上2002に再掲）。池上教授はさらに、この一篇のテキスト完成を目指し、1977年の録音の表記・分析を早くから進めておられたようである。

筆者（山田）は2006年、津曲敏郎教授を介して、1977年の録音データと池上教授による手書きのノートのコピーを受け取り、テキスト化の作業に着手した。はじめはノートに音声記号で書き起こされたテキストを、録音を聴きながら音韻表記でパソコンに入力していった。ウイルタ語で語られる語りの部分は、既刊の辞書（池上1997）などを調べれば表記を確かめて分析することができたが、謡われる部分はウイルタ語ではなく、参考にできる情報がないため、この段階では表記を確かめることも分析することもできないように思われた。

2007年秋、津曲教授がエレーナ A. ビビコワ氏に「シーグーニ物語」テキスト化の協力を依頼した。ビビコワ氏はウイルタ語北部方言の話者で、エウェンキー語サハリン方言の知識ももっている。同氏は、津曲教授から受け取った録音データを聴きながら、山田が電子化したローマ字式音韻表記の原稿をご自分でロシア字式音韻表記に転写して、ロシア語訳を開始した。

翌2008年春からビビコワ氏と山田が協力して、本資料の表記確認と分析を進めた。具体的には、ビビコワ氏が手書きしたロシア字式音韻表記とロシア語訳のテキストを山田が預かり、山田はそれを参考にローマ字式音韻表記の確認と編集をし、分析を加えるという方法で作業が進められた。

2009年6月には、ビビコワ氏のほか、イリーナ Ja. フェジャエワ氏（ウイルタ語北部方言話者）、クラウディヤ F. マチェヒナ氏（エウェンキー語話者、サハリン州出身）を札幌に招聘し、録音を聴きながら共同で表記確認と分析の作業を行った。また、2010年5～7月にはサハリン州ノグリキ町でエカチェリーナ A. ボリソワ氏（エウェンキー語、ハバロフスク地方出身）からも協力を得ることができた。

謡う部分で使用されることばについて

池上（1984a）はニグマーの謡う部分がエウェンキー語であると述べているが、2007年からの資料化作業によって、これが（少なくとも日常会話の）エウェンキー語そのままではないということがわかった。エウェンキー語を母語とするマチェヒナ氏やボリソワ氏に録音を聴いていただいたが、お二人とも内容を理解できない。ビビコワ氏が音韻表記と文献を照らしてゆくことで、謡う部分のなかにエウェンキー語に似た形式を見つけて、ようやく分析に当たりをつけることができるようになったが、それでもなお不明の点が多く残されている。

また、謡う部分では、母音を長くのばして発音することがあるばかりでなく、語頭の母音の前などに n の音が余分に加えられたり、語末に i がついたりすることがある（池上 2002: 85）。このような韻律的な操作もまた、分析を難しくしている。

池上教授のノートの端に「チヨサンハ killəə［筆者注：エウェンキーのこと］ト話シタコトナイト」というメモ書きがある。佐藤氏はエウェンキーと接したことがなく、エウェンキー語の会話を解さなかったと考えられる。だが、池上教授のノートには、佐藤氏が謡う部分の一部の語をウイルタ語に訳したと思われるメモ書き（本資料では脚注に（i）として示す）があり、佐藤氏は十分に意味を理解したうえでニグマーを謡っていたことは明らかである。佐藤氏がニグマーの謡う部分でつかった「ことば」はエウェンキー語そのものではなく、口頭伝承の過程で本来のエウェンキー語から大きく変化した、ウイルタのニグマーに特有の「雅語」の一種と考えられる。佐藤氏はそれをエウェンキー語だと考えていたのだろう。

しかし、もととなったエウェンキー語がどの方言であるか、いつごろエウェンキーからウイルタに伝わり、どのように変化したのか、今後はエウェンキー語やエウェンキーの口頭文芸との体系的な比較のうえで注意深く検討していく必要がある。

本篇の内容構成について

ウイルタ語（南部方言）で語る部分は地の文を、エウェンキー語に似たことばで謡う部分は登場人物のせりふを表わす。

語る部分は、語り手がどこかから伝え聞いたことを聞き手に向かって再現するように、第三人称の伝聞形式で進行する。この形式は、南のウイルタの他のジャンル（テールグやサフリ）の語りと共通する。

謡う部分には、数パターンの節（ふし）と折返し句の組み合わせがある。これは池上（1984a）が「物語の登場人物が第一人称で述べ、各登場人物に特有の折返し句（refrain）」をともなうといっているものである。主な登場人物の折返し句を次に挙げておく。たとえば、ǰaaleeru ǰaaleeru（ジャーレールジャーレール）という折返し句を入れて謡われれば、それが Siiŋuuni（シーグーニ）のせりふ、といった具合である。

せりふの折返し句	登場人物
ǰaaleeru ǰaaleeru ジャーレールジャーレール	Siiŋuuni シーグーニ （主人公、中のくにの剛の者）
niki niki mooi ニキニキモイ	Ŋiiwəəni ギーワーニ （シーグーニの弟）
ɲuri ɲuri ikandan ニュリニュリイカンダン	Nuŋərmək ニュゲルメク （上のくにの日の姫）
kəjə kəjə ikaandaan コヨコヨイカンダン	Kiildin キールディン （シーグーニとニュゲルメクの息子）
noolgeeru noolgeeru ノルゲールノルゲール	Xəuləni ハウラニ （上のくにの剛の者）
daaleeru daaleeru ダーレールダーレール	Numisimə ヌミシメ （中のくにの剛の者）
gəɲuu gəɲooi ゲニューゲニョイ	Maajin マーイン （ワリサという化け物の妹）

折返し句だけでなく、謡う部分には内容の繰り返しが多い。たとえば、シーグーニの出自をいう「中のくにで森に生まれたシーグーニ…」というくだりは、本篇の最初から最後まで繰り返し謡われる。

＜あらすじ＞

中のくにの剛の者シーグーニが狩りに出かけていて、幼い弟で怠け者のギーワーニだけが家に残っているところに、上のくにから美しい日の姫ニュゲルメクが鳥舟に乗って降りて来る。ニュゲルメクは汚い姿のギーワーニをきれいに洗ってから、自分が来たことをシーグーニに告げてはいけないと口止めをしたうえで翌日の昼に再び訪れる約束をし、上のくにへ飛び去る。ニュゲルメクの去った後に戻ってきたシーグーニは、汚れのとれた弟の姿を見ていぶかしむが、ギーワーニはニュゲルメクが来たことを告げない。

翌朝、シーグーニはまた狩りに出かけ、昼ごろにニュゲルメクが再び降りて来る。ニュゲルメクはまたギーワーニをきれいに洗って、飛び去った。戻ってきたシーグーニは弟を問い詰めて日の姫が来たことを聞き出し、翌朝は出かけずに薪置き場の中に身をひそめた。

昼ごろ、日の姫が近づいてシーグーニの留守をギーワーニに聞いて確かめてから、降り立った。再びギーワーニを洗っていると、薪木を散らしてシーグーニが立ち上がり、ニュゲルメクの乗って来た鳥舟を隠して、彼女を無理やり妻にして自分のそばに

とどめおいた。

しばらくたったある日、シーグーニの留守中、ニュゲルメクはギーワーニに自分の鳥舟がどこにあるか問いただした。ギーワーニはかたくなに知らないと言い張ったが、ニュゲルメクが差し出した美しいお手玉に心を奪われ、鳥舟を探し出して返してやった。ニュゲルメクはギーワーニにお手玉を渡して鳥舟に乗り、上のくにへと帰って行った。

家に戻ったシーグーニは弟がイヌの糞でお手玉遊びをしていて妻がいないことを知り、トナカイの身体からできた双頭のワシの鳥舟にまたがって上のくにへ旅に出た。ずっと飛んで上のくにに着いて、ニュゲルメクと自分との間に生まれた息子キールディンを見つける。

シーグーニは、上のくにでニュゲルメク、キールディンとともに暮らし始めた。ある日、ハウラニという上のくにの剛の者がやって来てシーグーニと弓矢で勝負するが、シーグーニに負けてしまう。

ニュゲルメクは（正式に）シーグーニの故郷である中のくにへ嫁入りすることにする。上のくにから大きなトナカイの群れと息子キールディンを連れ、シーグーニとともに中のくにへ降りて行こうとする。上のくにの人びとはその嫁入りの盛大なのを憎んで、シーグーニに矢を射かけたが、屈強なシーグーニはその矢をすべてはね返した。

シーグーニらは中のくにの森に戻ってともに暮らし、息子のキールディンは成長した。ある日キールディンが家から離れたところで遊んでいると、翼のついたトナカイに乗ったヌミシメという剛の者が近づいてくる。ヌミシメはキールディンがあまりに美しい少年なのを見て、自分の地へと連れ去る。

キールディンは自分と同じ年頃のヌミシメの娘と遊びながら暮らす。そこへ、上のくにの剛の者チンダーニがヌミシメに矢を射かけたが、ヌミシメにその矢をたたき折られて敗走した。次に、上のくにのムージャーニという剛の者がやって来て、ヌミシメに相撲をしかける。ヌミシメを負かしたムージャーニは、今度はキールディンに切りかかった。

そのとき地が揺れ動いて、地中からギーワーニが現れる（幼いとき怠け者だったギーワーニは成長し、英雄になっていた）。ギーワーニはムージャーニと矢や槍、とっくみあいで勝負する。疲れ果てて降参するムージャーニをギーワーニは投げ飛ばす。ギーワーニはヌミシメを呼んで、ムージャーニにとどめを打って殺させた。ギーワーニは、再び地中に入って姿を消した。成長して大人になったキールディンは、今度はヌミシメを連れて、父シーグーニと母ニュゲルメクのもとへ戻って行った。

キールディンは父シーグーニに、どこに行けば自分にふさわしい女性がいるかと尋ねた。シーグーニは、自分は何も知らないから、ニュゲルメクに聞くように息子に勧める。キールディンがニュゲルメクから言い伝えを聞いていると、ギーワーニが現われてともに耳を傾けた。ニュゲルメクは、三つの海を越えた先の牧地に化け物がいることを話し聞かせた。

キールディンとギーワーニはともに旅に出た。キールディンは母ニュゲルメクの鳥舟に、ギーワーニは兄シーグーニの鳥舟に乗って、三つの海を越え、海の真ん中を照らす太陽へ向かって飛んで行った。

着いた先でワリサ、チョロロという名の化け物がいた。キールディンとギーワーニは力を合わせてたたかい、化け物を退治した。化け物の妹にマーインという美しい姫がいた。ギーワーニはマーインを妻にめとり、キールディンとともに故郷の森へ帰った。

参考文献

池上二良 1984a「カラフトのウイルタ族の英雄物語とその伝来」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』52: 1-4，東京外国語大学.

――（採録・訳注）1984b『ウイルタ口頭文芸原文集』北海道教育委員会／網走市北方民俗文化保存協会.

―― 1994「ウイルタ語の南方言と北方言の相違点」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3: 9-38［再掲：池上二良2001『ツングース語研究』: 247-283，汲古書院］.

―― 1997『ウイルタ語辞典』北海道大学図書刊行会.

――（採録・訳注）2002『増訂ウイルタ口頭文芸原文集』（ツングース言語文化論集16）文部省特定領域研究(A)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究A2-013，大阪学院大学.

山田祥子 2009「ウイルタの語り物ニグマーについての予備的考察」『昔話：研究と資料』37: 133-144，東京：日本昔話学会.

山本祐弘 1968『北方自然民族民話集成：オロッコ・ギリヤーク・ヤクート・樺太アイヌ』相模書房.

Ikegami, J. 1974 “Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen”. *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Voelker, Protokollband der XII. Tagung der Permanent International Altaistic Conference 1969 in Berlin*. 271-272. Berlin: Akademie-Verlag ［再掲：池上二良2001 『ツングース語研究』: 395-396，汲古書院］.

Роон, Т. П. 1996 *Уйльта Сахалина: Историко-этнографическое исследование традиционного хозяйства и материальной культуры XVIII – середины XX веков.* Южно-Сахалинск: Сахалинское областное книжное издательство / Сахалинский областной краеведческий музей.

（やまだ・よしこ／北海道立北方民族博物館）